大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

アメリカ小説の翻訳書に見られる問題点(上)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 陽介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011155

アメリカ小説の翻訳書に見られる問題点(上)

村　上　陽　介

原文と翻訳書を突き合わせてみると、食い違いが目立つことが多い。非常に残念なのは、単に1語あるいは数語にとどまらず、パラグラフ全体にいたるまで、比較的重要な箇所が翻訳書で脱落していることがよくあることである。

> Did you know there were great cities in Africa, greater than Milledgeville or even Atlanta, thousands of years ago? That the Egyptians who built the pyramids and enslaved the Israelites were colored? That Egypt is in Africa? That the Ethiopia we read about in the Bible meant all of Africa? (Walker, *The Color Purple,* 138)

これは、主人公の妹のネティが主人公に宛てて書いた手紙の一節であるが、アフリカ系アメリカ人でありながら、アフリカについてはまったく無知で、学校の教師から“savages”(137) がうようよしている場所だと聞いて信じ込んでいた彼女は、ここに書かれているような情報を書物から得たがために、やがてアフリカに行く決心をするわけであり、この一節は作品のなかで大切な機能を担っている。原文では、この箇所は1つのパラグラフを構成しており、翻訳書では、本来なら157ページの2行目から始まる新しい段落として訳出されるべきであるのに、脱落している。

脱落という現象はさておき、小論では、<翻訳書に見られる誤読>としてまとめることのできるさまざまな現象のうち、パターンとして認識しうる問題点、克服すれば応用が効くと思われる事項のみを具体的に取り上げてみたい。

i 数 詞

マーク・トゥエインの *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* の翻訳書のなかに次のような箇所がある。

> （前略）一国の政府の年間出費は、全人口の各一人一人の三日分の平均賃金――どの一人も仮りに成年男子と見なして計算しているが――を寄付したのと同等になる。もし六億人の国家で、平均賃金が一日二ドルというところを例にとれば、各一人一人から取られた三日分の賃金は三億六千万ドルとなり、その政府の出費をまかなうだろう。(317－318)[1]

全国民の3日分の賃金の総額は、6億×2×3だから、最後のところの「三億六千万ドル」は、<三十六億ドル>の間違いではないかという疑問がわくが、じつは原文では、引用箇所の「六億人の国家」の部分は、"a nation of 60,000,000"(Twain, 254) となっており、6千万×2×3だから、「三億六千万ドル」で正しいのである。むしろ、「六億人の国家」のところが、<六千万人の国家>となるべきであった。これなどは、桁が大きいので、誰でもついうっかりしてしまうケースとも言える。（ただ、この場合は、1889年に出版された、6世紀のイギリスを舞台にしている作品で、トゥエインが「六億人の国家」を例として持ち出していることがやや奇異に感じられるので、それで翻訳者が原文を再点検し、読み誤りに気がつくということになったとしても不思議ではない。）ともあれ、このような誤りの場合には、翻訳書の読者は、つじつまが合わないことに簡単に気づくし、必要とあらば原文をチェックすることになるであろうから、影響は少ない。

実際、"fifteen girls" (Puzo, 313) が「五人の女」（下、129）、"forty-five dollars" (Faulkner, *Go Down, Moses,* 226) が「五ドル」(264)、"at about seven" (Styron, 167) が「七時半ごろ」（上、253）になったりするのは珍しいことではないが、一般的にはそれほど深刻な解釈上の違いを産み出すというわけでもない。ただ、エレベーターが "a mile a minute" (Ellison, 293) のスピードで上昇したとあるのを「一分間に十マ

イル」(Ⅱ、10) のスピードで上昇したと訳出されると、翻訳書の読者は、語り手が誇張しているのだと誤解するかもしれない。また、"Now, I come from a stock that has been damned and derided for more than a hundred years. . . ."(Bellow, 86) という語り手の述懐の "for more than a hundred years" の部分を「千年以上にわたって」(121) と訳出されると、翻訳書の読者は原文から受けるのとはまったく違った印象を受けることになろう。

シャーウッド・アンダスンの *Winesburg, Ohio* といえば、中西部の田舎町の住人の孤独な人生を扱った物語を集めたものとして知られるが、この町の人口は、"the eighteen hundred citizens of the town"(Anderson, 158) という記述から、<1,800人>であると分かる。ところが、ある翻訳書では、この箇所は、「町の一万八千の人口」(171) となっている。実際のところ、原文を読んでいて "the eighteen hundred citizens of the town" という記述に出くわして、この町の人口としてはこれでも多すぎると思う読者も多いはずで、「一万八千の人口」というのは、文字通り<桁はずれ>である。それでも、翻訳書の読者のなかには、自分の感覚のほうを疑う人もかなりいるかもしれない。そうなると、こういった読者が頭で描くこの町のイメージは、作者が意図したものとはまったく異なったものになってしまう。

ここで、いわゆる数詞ではないが、数を示すもので広く誤解されている "a few" について少し述べておきたい。*Sophie's Choice* の翻訳書で次のような一節が出てくる。

> 二十歳代では、人生のもっとあとの時期よりも、二、三年の差がはるかにものを言う。つまり、ネイサンは三十歳ぐらいでぼくは二十二歳だから、二人が四十代の場合には考えられないほど、ネイサンは実質的に「年長」となるわけだ。(上、208)

語り手とネイサンは約8歳の違いがあるわけで、なぜ語り手が「二、三年の差」うんぬんと言うのかよく分からない。原文では以下のようになっている。

In one's twenties a few years' edge counts for much more than it does later on in life; that is, that Nathan was around thirty and I was twenty-two made him substantially the "elder" in a way that those years could not have made in our forties. (Styron, 135)

さまざまな翻訳書を検討すると、<a few> を ＜２、３(の)＞ で反射的に置きかえているものが多いことが見て取れる。実際、<a few> は、次稿で述べる <hip(s)> と並んで、最も頻繁に誤って訳出される語句であるが、<a few> は ＜２、３(の)＞ という意味ではない。*Longman Dictionary of American English* の "a small number [of], but at least some" あるいは *Collins Cobuild English Language Dictionary* の "*A few* things or people means a small number of them, but not very many." という語義説明からも分かるように、具体的な数を前提とする表現ではないのである。私が10人程度のアメリカ人に尋ねたところでは、人によってばらつきがあったが、１番小さい数としてはほぼ一致して＜２＞からであったが、１番大きい数としては＜９＞まで含めるという人も何人かいた。一般的には、<a few ～> については、<a few days> は ＜数日＞、<a few books> は ＜数冊の本＞ というふうに、＜数～＞ と考えておけばよい。上に引用した一節の "edge" は、＜優位＞ という意味なので、"a few years' edge" は、＜数歳年齢が上であること＞ と訳出しておけばよいのである。

さて、トゥエインの作品の翻訳書のものに始まりこれまで指摘してきた事例に関しては、数詞あるいは数を示す語句さえきちんと読み取れば、問題は解決する。しかし、それだけでは正しく内容を把握できない場合もある。*Love Story* の翻訳書で「ぼくのＭＧはマサチューセッツの有料高速道路のところで［スピードの極限の］百五キロを出していた。」(179) という箇所が出てくるが、常識からいって変である。原文では、"I had the MG at a hundred and five on the Mass Turnpike."(Segal, 119) となっている。言うまでもなく、原文の単位はマイルであり、＜105マイル＞という

わけだから、換算すると約169キロとなる。これなら納得のいくスピードである。(アメリカの現代小説を翻訳しようという人が、アメリカで車のスピードを表わす際の常用単位がマイルであることを知らないというのも不思議であるが、それにもまして、スポーツカーで極限まで飛ばして、時速<百五キロ>というのが変だと思わないというのも不思議である。)

Go Down, Moses のなかの "The Bear" に登場するライオンという名の大きな犬については広く知られていようが、この犬について、その「肩巾は三十インチを優に越え」(243) ていたという箇所が、翻訳書に出てくる。「三十インチ」といえば、約76センチであるが、いくら大きな犬だといっても、これはまゆつばものである。しかも、この犬の体重は、推測したところ、"almost ninety pounds"(Faulkner, *Go Down, Moses,* 209) であったと原文に書かれている。つまり、約41キロということになる。肩巾が76センチを優に越えているのに、体重が約41キロの犬というのは、ありえないであろう。原文では、翻訳書のこの犬の肩巾に関する部分は、"It stood . . . better than thirty inches at the shoulders. . . ."(209) となっている。じつは、原文は、この犬の肩巾ではなくて、体高について述べているのである。鹿、牛、馬などの高さは肩のところで計り、それを <肩高> と呼ぶことは、子供向けの学習図鑑などにもあるとおりであり、問題の箇所は、<体高30インチ以上あり>という意味なのである。[2] すでに、エレベーターの速度について「一分間に十マイル」と訳出してあるケースに触れたが、「マイル」という単位を使ったので、翻訳者は、これが異常なスピードであるとは思わなかったのかもしれない。メートル法での時速表示で考えると、<時速約965キロ> になるわけだから、原文を再度読み直す気になって当然のスピードと言える。同様に、今問題にしている事例でも、「インチ」という単位を使ったので、犬の肩巾が「三十インチを優に越え」ていたと読み取って、奇異に思わなかった可能性がある。

Invisible Man の翻訳書で、"[h]undred proof bonded whiskey" (Ellison, 529) を「規格証明ずみのウィスキーが百本」(Ⅱ、345) と訳してあるが、<数詞+proof> が、アルコール飲料の強度を示す表現であることを知らなかったためであろう。(ただし、数詞と <proof> の間にハイ

フンを置くのが通例で、この例のようにハイフンを省くのはまれである。）一般的には、<proof> で示される数値の半分の％の強度と考えておけばよい。つまり、“[h]undred proof” は、＜50度の＞ という意味になる。ちなみに、“bonded whiskey”は、＜瓶詰め前に保税倉庫に4年以上入れておいたウイスキー＞ のこと。

車の速度、アルコールの強度のみならず、視力、温度、面積なども単位あるいは表示の仕方が異なるので、注意が肝心である。＜8.5インチ×11インチの複製画＞ という意味の “an 8½×11 print” (Roth, 27) を、数値だけ書き移して、「$8\frac{1}{2}$×11の原色版」(47) と訳出したりするのは論外と言えよう。[3]

ジョン・アップダイクの *Rabbit, Run* では、主人公が妻子を棄てて家を出るが、このとき妻は、2人目の子供を身籠もっており、“nine months expecting” (Updike, 153) であったとされている。WHO（世界保健機関）の方式では、妊娠期間は満で示すことになっているが、アメリカでも同様である。日本では、一般的には数えで妊娠暦を示すので、ずれが生じる。翻訳書では、主人公の妻は「妊娠九か月」(上、223) ということになっているが、「臨月」とすべきである。事実、ほとんど時間が経過していないときに、彼女に関して、“[S]he is a week due now. . . .” (158) という発言がなされる。この小説では、妻がいつ出産という事態になっても不思議ではないという時に、主人公が家を出てしまっていることが問題になっているのであり、「妊娠九か月」と理解するのでは、緊迫度がすっかり違ってくる。

イギリスでも満で妊娠月数を示すが、そのことを知らなければ、*Collins Cobuild English Language Dictionary* の ＜intercourse＞ の項にある “Intercourse may mean a baby in nine months' time.” という例文を不審に思ったりするかもしれない。また、妊娠から出産までを9ヵ月ととらえることを頭におかなければ、あるウォールト・ホイットマンの詩がまるで “nine months” (Lewis, 53) のように9つのスタンザで書かれているといった批評家の指摘を読んでも、何のことか見当がつかないということにもなろう。あるいはまた、19世紀前半のアメリカで、婚前妊娠による “‘seven- and eight-month' children” (Carroll and Noble, 146) が

増えたという記述を読んでも、なぜ <nine-month children> への言及がないのか、不思議に思ったりするかもしれない。アメリカで妊娠中絶が大きな政治問題になっているのは周知のことであるが、これについての議論のなかで、<the first trimester of pregnancy> などの表現が頻出する。この "trimester" という単語も、妊娠から出産までを9ヵ月ととらえているからこそ使われるのである。日本での状況も変わりつつあるが、今はまだ、"seven or eight months pregnant"(Walker, *The Color Purple,* 32) とあれば、翻訳書にあるように「七、八ヵ月の腹で」(42) とはしないで、<妊娠八、九ヵ月の状態で> とするほうがよいと思われる。

ii　誤った類推

Sophie's Choice の翻訳書で、語り手が頭のなかで考えた台詞、"Up yours, Weasel, you're firing a man who's going to be as famous as Thomas Wolfe."(Styron, 22) の "Up yours" の部分を、「後悔するなよ」(上、39) と訳出してある。これは、<stick it up your ass> の短縮されたものと考えられている、ありふれた卑語・タブー語で、<くそったれめ>などと訳出すべきところである。同じ翻訳書で、「オカマを掘る」(上、237) と訳出されている "go down on" (155) も、しごくありふれた卑語・タブー語で、<フェラをする>といった意味である。

<独房で監禁されている人>という意味の "a person in solitary" (Faulkner, *Light in August,* 446) が「[ある人が] ただひとり」(337) と訳出されているというケースでは、次の節で述べるような単語の混同、つまり、"solitary" と <solitude> の混同が起きたというよりも、なんらかの理由で、"solitary" の意味を <solitude> の意味と同じだと誤って類推したものと考えられる。<独房監禁>は、<solitary confinement> が正式な言い方であるが、口語では、単に、<solitary> と言うことが多い。

翻訳書では、"[Ike] saw the camp—a paintless six-room bungalow set on piles above the spring high-water. . . ."(Faulkner, *Go Down, Moses,* 187) を「[アイク] はキャンプを見た——増水した春の川

の流れの上に、杭にのっけて建てられた、ペンキも塗ってない、六部屋のバンガローだった。」(218) と訳出してある。おそらく、「増水した……川の流れ」というのは、“high-water” の語義を類推した結果であろう。この “high-water” は、ハイフンがつかぬ形がふつうだが、＜最高水位＞ という意味で、“above the spring high-water” は、＜春の最高水位よりも高い位置に＞ という意味になる。満潮時の水位を表わす＜high tide＞という単語からこの “high-water” の語義を正しく類推することはそれほど難しくはないであろう。先行する部分で、アイクが問題のキャンプを見たのは冬ということになっているので、「増水した春の川の流れの上に」と訳出したのでは、翻訳書の読者を戸惑わせることになろう。

同じ翻訳書で、伝説化した大熊のハンティングの様子を見物しようと思ってやって来た男たちのうちの一人の、“We wont do no shooting, lessen he runs over us.”(213) という発言を、「おらたちは、やつに跳びかかられるのはいやでがすから、まるっきり鉄砲は撃ちやせんでのう。」(249) と訳出してあるが、“lessen” を <lest> のくずれた形だと類推した結果であろう。この単語は、方言で、<unless> の意味をもつのであるが、翻訳書では、原文の ＜(ただ見物させてもらいたいだけだが、) 熊がぶつかってきたらやむなく銃を撃たせてもらう＞ という論理が、＜銃を撃ったら熊に跳びかかられるので、撃たない＞ という論理に変わっている。翻訳書の論理では、この発言に対して、ハンティングの主催者が、“You are welcome to shoot.”(213) とまじめに応じている理由がまったく理解できなくなるばかりか、前後半ページにかけて書かれている、半ば儀式化しているこのハンティングの主催者側と見物者側を取り巻く状況そのものの受け取り方が、原文の意図するものとはかなり隔たったものとなってしまう。

この項で挙げた語句のほとんどは、翻訳者が知っていて当然と考えられるが、それはともかく、まったく知らない語句であれば、やはり辞典を参照すべきであったろう。最後に挙げた <lessen> は、ウェブスターの第3版のような大型辞典、あるいは、方言辞典などを参照しないと確認できないが、[4] 他の語句については、比較的容易に辞典でその意味を確認できる。

iii　識　別

単語の識別の誤りには、2つのパターンがある。1つは、<豚の（頭、耳などの）塩漬け> という意味の "souse" (Walker, *The Color Purple,* 217) を「ソース」(252) と訳出してある例が代表しているような、自分の知らない単語を自分のよく知っている単語に見誤るというパターンである。[5] もう1つは、<明るい色のテント群> という意味の "gay-colored tents" (Twain, 385) を「灰色のテント群」(474)、<僕はそんなにはっきりした形で暴力を振るうことはない。>という意味の ". . . I am not so overtly violent." (Ellison, 5)　を「僕もこれほど行き過ぎた暴力を振うことはない。」(I、12) と訳出してある例が代表しているような、ついうっかり別の単語に見誤るというパターンである。[6] この2つ目のパターンの誤読はきわめて多く、極端な場合には、"sheepish" (Walker, *The Color Purple,* 121) を <sleepy>、"land" (Updike, 240) を <island>、"glass" (Updike, 271) を <grass>、"barmaid" (Styron, 378) を <mermaid> に見誤って、それぞれ、「眠そう」(139)、「島」(下、104)、「草」(下、149)、「人魚」(下、111) と訳出してあったりする。

また、おそらく元の単語を正しく識別したのだろうが、連想に邪魔されて、"pig" (Walker, *The Color Purple,* 231) を「犬」(270)、"bosom" (Walker, *The Color Purple,* 85) を「お尻」(100)、"hours" (Puzo, 427) を「分」(下、309)、"wedding" (McCarthy, 8) を「結婚」(10)、"engagement" (Bellow、41) を同じく「結婚」(60)、"geese" (Styron, 130) を「アヒル」(上、201)、"penny" (Styron, 202) を「ドル」(上、303)、"goats" (Updike, 50) を「羊」(上、69) と訳出するような例は枚挙にいとまがない。すでに数詞の項で触れたが、"for more than a hundred years" (Bellow, 86) が「千年以上にわたって」(121) になったりするのも、同じように連想が働いたからかもしれない。

また、"toward sunset" (Bellow, 25) が「明け方になって」(37) に、"grandmother" (Ellison, 230) が「おじいさん」(I、323) に、"Northampton" (Roth, 12) が「サザンプトン」(21) になったりするの

も、単語の識別を誤ったためというより、対を成す単語の語義のほうが前面に出てきてしまったためであろう。私たちの頭のこういった働き方を十分認識し、最初から予測してかかれば、多少はこの種の誤りを避けることができるかもしれない。[7]

次に、もっと作品の解釈に関わるような誤認の例を2つ示そう。ラルフ・エリソンの *Invisible Man* の1章で描かれる、10人の黒人の男子高校生が乱戦を行なう場面、いわゆるバトル・ロイヤルの場面は、作者の力量がみごとに表れている場面として、高く評価されている。主人公は、卒業式での演説を町の白人の名士たちの前で繰り返すように校長に言われ、あるホテルの主舞踏室に出かけるのであるが、ついでにこの名士たちの余興として行なわれるバトル・ロイヤルにも加わるように言われる。この屈辱的なバトル・ロイヤルに先立って、高校生たちは部屋の前方に進まされ、そこで一人の全裸のブロンドの女性と直面させられる。主人公は、罪の意識と恐怖を覚え、歯がカタカタ鳴り、鳥肌がたち、膝ががくがくするような状態になりながらも、このブロンドの女性を見ずにはおれない。

> Her breasts were firm and round as the domes of East Indian temples, and I stood so close as to see the fine skin texture and beads of pearly perspiration glistening like dew around the pink and erected buds of her nipples. I wanted at one and the same time to run from the room, to sink through the floor, or go to her and cover her from my eyes and the eyes of the others with my body; to feel the soft thighs, to caress her and destroy her, to love her and murder her, to hide from her, and yet to stroke where below the small American flag tattooed upon her belly her thighs formed a capital V. (Ellison, 19)

翻訳書では、最後の "and yet to stroke where below the small American flag tattooed upon her belly her thighs formed a capital V" の部分は、「同時に、彼女のおなかの小さなアメリカ国旗が文身してあ

る部分の下の、両ももが大文字のVを形づくっている所へ、一撃を加えてやりたくもあった。」(Ⅰ、32) と訳出してある。おそらく、“stroke” を <strike> と誤認したためであろう。たしかに、先行する部分で、“to caress her” と “[to] destroy her,” “to love her” と “[to] murder her” が “and” の前後に置かれて並列構造をなしているので、やはり “and” に導かれるこの部分も、“[to] destroy her” と “[to] murder her” と同様、この女性になんらかの攻撃を加える行為を示すと思ったとしても、根拠なしとは言えない。しかし、この “and” の前にある “to hide from her” は、“to caress her,” “to love her” と意味的に同じカテゴリーにある表現ではない。つまり、“to hide from her” の所で転調が起きているのである。この語り手は、“love” したい、“caress” したい、と思いながら、そう考えること、また、その考えを実行に移すことが社会的なタブーであるがために、<彼女から隠れたい> と思ったわけである。そして、“and yet” で逆接となり、この女性に対する一連の両面価値的な気持ちの締めくくりの表現として、「両ももが大文字のVを形づくっている所」を <撫でたいと思った> となっているのである。Houston A. Baker, Jr. は、この小説に関して、“The black phallus is a dominant symbol in the novel's formal patterns of behavior. . . .”(181) と述べているが、この場面は、白人男性によって黒人の若者たちの心理的な<去勢>が行なわれる場面であり、この小説の主旋律とつながる重要な箇所である。翻訳書のように読んでもそれなりに意味は通るが、最後に「一撃を加えてやりたく [思った]」というのと、<撫でたいと思った> というのでは、大きく食い違っていると言わざるをえない。

次に、まず、*Absalom, Absalom!* の翻訳書からの引用を見よう。

> ……度胸があり賢くありさえすれば、手っとりばやくお金が手に入る場所が自分に見つかったということさえ知らなかったのだ……そこでは、その賢さと度胸があれば、金はたやすく手に入ったかも知れないが、同時に、正義は金に随伴するものであり、金は金(きん)でできているから光っているのではなく、血で光っているのだった。(232)

「正義は金に随伴する」というのは、どうも変である。新聞などで報道される人間の行状を読む限り、＜金は不正義に随伴する＞ というほうが真理に近いような気がする。その意味で、金が「血で光っている」というのは、それなりに納得がいく。いずれにせよ、原文を読めば、疑問は氷解する。

> . . . [he] did not even know that he had found the place where money was to be had quick if you were courageous and shrewd . . . but where high mortality was concomitant with the money and the sheen on the dollars was not from gold but from blood. . . . (Faulkner, *Absalom, Absalom!*, 201-202)

つまり、翻訳書では、“mortality” を <morality> と誤認しているのである。こういった誤認はありがちなことであるが、原文では、次の一節で、問題の「場所」について、“a spot of earth which might have been created and set aside by Heaven itself . . . as a theatre for violence and injustice and bloodshed and all the satanic lusts of human greed and cruelty”(202) などと説明されているので、正しい読みに到達するのは難しくはないはずである。ただ、翻訳書のみを頼りにしている人のなかに、この誤りの箇所が何か深遠な哲学を示唆していると誤解する人が出てくる可能性が無きにしもあらずである点が、気がかりである。

iv 多義性

単語の形は正確に識別するのだが、多義性に惑わされ、作者の意図した意味とは異なる意味に受け取ってしまうということは頻繁に起きる。ただ、同じ形をした別の単語と混同する例は翻訳書では意外に少ない。少しだけ例を示せば、＜挽き割りトウモロコシ＞ という意味の “meal” (Bellow, 146) が「食物」(204)、＜しばらくの間＞ という意味の口語の “spell” (Walker, *The Color Purple,* 68) が「おまじない」(81) と訳してあったりする。また、＜試合場＞ という意味の “lists” (Twain, 78) を「一覧（リスト）」(105)

と訳出してあるのは、<list> の複数形と混同したためであろうし、＜おかわり＞という意味の <second> が使われた“for seconds”(McCarthy, 25) という句を「みるみる［うちに］」(37) と訳出してあるのは、“seconds”を ＜秒＞ という意味の別語の <second> の複数形と混同した結果であろう。また、これは短編集からの例であるが、＜ビャクダン＞という意味の “sandal” (Walker, *You Can't Keep a Good Woman Down,* 78) を「サンダル」(136) と訳出してあったりする。

多義性が大きな障壁となるのは、同一の単語の場合がほとんどであるが、残念ながら、翻訳者が複数の語義を知っていて、そのうちからもっとも適切と思われるものを選んだのではなく、原文で使われている語義を知らないまま、訳出したのではないかと思われるケースが多い。ただ、＜(タクシーの) 空車標識＞ という意味の“flag” (Ellison, 474) を「旗」(Ⅱ、264)、＜群れ＞という意味の “choir(s)” (Faulkner, *Light in August,* 63) を「聖歌隊」(47)、＜相性＞ という意味の“chemistry” (Styron, 222) を「化学作用」(上、332) と訳出してあるようなケースでは、多義性に気づいていなかったとしてもやむを得ないとも言えるし、また、翻訳書のような読みが、必ずしもコンテキストに合致しないとは言い切れない。

ところが、多義性が認識されていて当然と思われる単語についても、同様の読み誤りが目立つ。たとえば、“. . . a woman was hanging wash on a roof.” (Ellison, 169) および “. . . men and boys stood on the roofs. . . .” (Ellison, 443) の “roof(s)” は＜屋上＞という語義で使われているのであるが、翻訳書では、コンテキストにそぐわないにもかかわらず、どちらも「屋根」(Ⅰ、237；Ⅱ、220) と訳出されている。また、“wash the ring off the tub” (McCarthy, 26) の “ring” は、＜(浴槽についた) 垢の輪＞ のことであるが、＜指輪＞ だと誤解して、全体を「バスタブから指輪を拾って来てや［る］」(39) と訳出してあるのも、やはりコンテキストにそぐわない。さらにまた、＜ニューイングランド人の＞という語義で使われた“Yankee” (Updike, 126) が「北部人(ヤンキー)の」(上、184)、＜従業員(たち)＞ という語義で使われた “filling station hands” (Waller, 75) の “hand(s)” が「手」(101) と訳出されていたりするが、

これらの場合も、コンテキストに合致しない。

もちろん、私たちは、最初からある単語の全部の語義を知っているわけではないから、ときとして多義性に足をすくわれることがあるのはやむを得ない。しかし、コンテキストに合致するかどうか、内容的につじつまが合うかどうか、常に注意を払うことによって、意図された語義を正しく理解できる場合が多い。その点を次のいくつかの例で具体的に考えて見よう。

これは小説ではなく、劇の翻訳書の例であるが、"a richly feathered male bird among hens" (Williams, 128) を「雌鶏(めんどり)の群れのなかの豪勢な羽をつけた一羽の雄鶏(おんどり)」(32) と訳出してある。アメリカでは、「鶏」といえば ＜白色レグホン＞ を指すのがふつうなので、「豪勢な羽根をつけた一羽の雄鶏」というのは、不自然である。ここでは、"a . . . male bird" は、文字通り、＜雄の鳥＞ であって、イメージとして思い描くべきは、＜キジ＞ や ＜クジャク＞ の類の雄である。翻訳者は、おそらく、"hens" が、「雌鶏（の群れ)」という語義であると思い込んで、"a . . . male bird" を「雄鶏」であると受け取ったのであろう。ところが、たとえば、<peacock> と <peahen> でクジャクの雌雄を表現し分けることからも類推できるように、<hen> が雌の鳥一般をさすことがしばしばある。(そして、<cock> が雄の鳥一般を指す。)[8] 今問題にしている箇所の場合も、そういったケースの１つと考えられる。つまり、ここでは、"hens" は、<female birds> と同義であり、直前に "a . . . male bird" が来ているために、変化をもたせる目的で、"hens" が使われていると考えられるのである。

次のものは、*The Color Purple* の主人公の手紙からの一節である。

> Well, it not that long after dinner and here you is hungry again[, I say].
>
> He[Harpo] don't say nothing. Eat.
>
> Course, I say, suppertime not too far off either. Bout three four hours. (*Walker, The Color Purple,* 63)

翻訳書では、“dinner” を「夕食」(76) と訳出してある。原文では、ハーポが食べているとき、彼の妻ははしごで屋根のところに上って釘を打つ作業をしていることになっているのだが、「夕食」後、それほど時間がたっていないにしても、不自然な感じを与える。翻訳書では、つじつまを合わせるために、“suppertime” を「夜食の時間」(76) と訳出してあるが、これは、<夕食時> という意味であり、ハーポが食べているのは、<夕食時> から3、4時間前ということになる。つまり、この場合の “dinner” は、<昼食> という語義で使われているのである。また、同じ翻訳書で、やはり主人公の手紙の一節である “By time I git all the children ready for school it be dinner time.” (3) を「弟や妹が学校へ行く支度を手伝いおえると、もう夕食の時間がやってくるというしまつ。」(9) と訳出してあるが、これも不自然と言えよう。この場合も、むろん、“dinner time” は <昼食時> という意味である。南部では、<昼食> という意味で <dinner> を使うことはごくふつうのことである。したがって、南部を舞台にした作品を翻訳しようと試みる人なら当然知っていてよい事柄であるが、*Longman Dictionary of American English* で “the main meal of the day, eaten either at midday or in the evening” と定義してあることからも判断できるとおり、これは必ずしも南部に限られたことではない。

さて、私たちが、次の文の “occasion” という単語は、<時> あるいは <機会> という意味であると思って全体を読んだと仮定しよう。(文中の “the evil” は、<the king's evil> のことで、かつて国王が触れると治ると信じられていた、瘰癧のことである。)

> In my youth the monarchs of England had ceased to touch for the evil, but there was no occasion for this diffidence: they could have cured it forty-nine times in fifty. (Twain, 256)

2行目の “no occasion for this diffidence” が、<この気おくれを示す機会> という意味であるとすると、先行する部分との間に整合性が見られない。そう考えながら辞典を参照し、この場合の “occasion” が <理由>

という語義で使われていることに気づくのはそれほど難しくなかろう。この箇所は翻訳書では次のようになっている。

> わたしの若い頃、英国の君主がたは瘰癧のために手を触れるということをやめてしまっていたけれども、気おくれで発揮する機会がまるでなくなっていた彼らは、五十回のうち四十九回は治して見せられたのに。(321)

結局、無理につじつまを合わせようとして、先行する部分を敷衍する内容を導くという、コロンの基本的な役割まで無視してしまう結果となっている。[9]

次の例はやや難しい。

> A gentleman who had come twice before to dicker for me, without result, or indeed any approach to a result, came again. (Twain, 361)

翻訳書では、次のように訳出されている。

> 貴紳の身で、以前二回ほどわたしを手に入れる取り引きをしにやってきた男があったが、その時はうまく実を結ばなかったというか、実際、実を結ぶに至る道を開くこともなかったのに、またもやこのことをやろうとしてやって来なすった。(448)

じつは、原文の "approach" は <似ているもの> という語義で使われている。つまり、"any approach to a result" は、<成果らしきもの> という意味なのである。*Collins Cobuild English Language Dictionary* では、この語義を説明するために、"This office is probably the nearest approach to hell that there is!" という例文が示されているが、単独でこの例文を読んだ場合には、"the nearest approach to hell" の部分を、<地獄への1番の近道> という意味だと信じて疑わない人が多いのではな

いだろうか。小説ではなくエッセイからの例であるが、ついでに、次のものにも触れておきたい。

> Who does not remember the interest with which when young he looked at shelving rocks, or any approach to a cave? (Thoreau, 18)

翻訳書では次のようになっている、

> 小さい頃、棚のような格好をした岩や、洞穴の入口を見たときのわくわくした気持ちを誰がおぼえていないだろうか？（48）

しかし、"[an] approach to a cave" を「洞穴の入口」と受け取るのは無理がある。この場合もやはり、＜洞穴のようなもの＞ といった意味なのである。微妙な違いではあるが、本物の ＜洞穴＞ ではなく、＜洞穴に似たもの＞ が問題になっているのである。

多義性についてこれまで示してきた例は、比較的断片的なもので、作品全体の解釈に影響を与えたりはしないし、また、作品のある重要な事件、モチーフなどに関する無理解を反映してわけでもない。したがって、マイナーな問題と言ってもよい。しかし、これから述べるいくつかの事例は、いずれも作品の重要な部分の解釈に密接に関わるものであり、決して軽んじられるべき事柄ではない。まず、名詞の例を検討しよう。

The Wild Palms の翻訳書からの次の引用は、ハリー・ウィルボーンという男と医者のやりとりの場面からのものである。

> 「ぼくは画家になるつもりなんです。（中略）」
> 「画家に？　しかし、ここは建物もないし、ブームも終わったし、発展するようなことはないな。そんなことは九年も前に終わったんですよ。あなたはまさか仕事の当てもなく、全然契約もないのにここへ来たとでもいうんですか？」

「ぼくは絵を描いているんです」と［ハリー］は言った。「すくなくとも、自分ではそう思っています（中略）」

「絵を描いているんですか」と医者は言った。(17)

奇妙な会話であるが、原文は次のようになっている。

"I'm trying to be a painter. . . ."

"A painter? But there is no building, no boom, no development here any more. That died nine years ago. You mean, you came here without any offer of work, any sort of contract at all?"

"I paint pictures," [Harry] said. "At least, I think I do. . . ."

"You paint pictures," the doctor said. . . . (Faulkner, *The Wild Palms,* 18)

1行目のハリーの発言のなかの "painter" は、翻訳書にある通り、「画家」という意味であるが、相手の医者は、<ペンキ塗装工> の意味に誤解したのである。それで、彼は、"But there is no building, no boom, no development here any more." うんぬんと受け答えをしているのである。(この "building" は <(住宅などの) 建設>、"development" は、<(宅地などの) 開発> という意味であり、原文とは少しずれるが、この発話は、<ここではもう建設ブーム、開発ブームは終わってしまってますよ。> とでも訳しておけばよい。) ハリーは、医者が誤解したことが分かったので、その誤解を解くために、6行目で、別の表現を使って、"I paint pictures[.]" と言い直したのである。ハリーが <ペンキ塗装工> のような実際的な職業に就こうとせず、芸術的創造に携わろうとしていること、誤解した相手が、ハリー自身がかつて目指していた医者という職業についていることには、作品を読み進めていくうちにやがて分かるように、深いアイロニーが込められており、少なくとも、この2重小説である『野性の棕櫚』の

「野性の棕櫚」のほうのテーマそのものと関わっているといえる。多義性に気づかず、翻訳書のように訳してしまうと、フォークナーの計算が無駄になるばかりか、注意深い読者を戸惑わせてしまうであろう。ただ、日本語では、「画家」と ＜ペンキ塗装工＞ の双方の意味を持つ単一の表現はないので、この会話をきちんと訳出するのは不可能と思われる。おそらく、「画家(ペインター)」、＜ペンキ塗装工(ペインター)＞ のようにルビを振る以外には方法はないであろう。

All the King's Men の若い一人称の語り手の述懐を翻訳した次の一節は、単語の多義性に気づかなかった結果、意味をたどれないものとなっている。

> わたしはだれかが納屋へ通じる門を開閉する音を聞いたが、振り返らなかった。振り返らなければ、蝶番(ちょうつがい)のついた門をぎいっと鳴らして開けたのはほんとかどうかわからないわけだ。このことはわれわれが把握しておいていいすばらしい原理だ。わたしはこの原理を大学に在学中ある書物から把握して死んでも放すまいと思っていた。わたしが人生で成功を収めたのはその原理のおかげだ。そのおかげでそのときまでのわたしになっていた。自分の知らないことは自分を傷つけない、なぜならそれは現実ではないからだ。わたしが大学生のとき持っていた本ではそれは理想主義と呼ばれていた。そしてその原理をつかんでからわたしは理想主義者となった。わたしはそのころ鳴り物入りの理想主義者だった。理想主義者なら何をしようと何が周囲で起ころうと問題ではない、なぜならそれはどのみち現実ではないからだ。(47)

この一節を読んで、「自分の知らないことは自分を傷つけない、なぜならそれは現実ではない」と考えることが、なぜ「理想主義」なのか、理解することは、まず無理であろう。「理想主義者なら何をしようと何が周囲で起ころうと問題ではない」というのも、変である。原文は以下のようになっている。

> I heard somebody open and shut the gate to the barn lot,[10] but I didn't look around. If I didn't look around it would not be

true that somebody had opened the gate with the creaky hinges, and that is a wonderful principle for a man to get hold of. I had got hold of the principle out of a book when I was in college, and I had hung on to it for grim death. I owed my success in life to that principle. It had put me where I was. What you don't know don't hurt you, for it ain't real. They called that Idealism in my book I had when I was in college, and after I got hold of that principle I became an Idealist. I was a brass-bound Idealist in those days. If you are an Idealist it does not matter what you do or what goes on around you because it isn't real anyway. (Warren, 33)

＜考え、思想、観念＞ などの意味をもつ <idea> と ＜理想＞ という意味の <ideal> を区別することにつねづね留意している人のなかには、翻訳書に見られるごとく、原文の "[i]dealism" は「理想主義」、"[i]dealist" は「理想主義者」という意味だと誤解してしまう人もかなりいるだろうと思われる。しかし、原文の "[i]dealism" は ＜観念論＞、"[i]dealist" は＜観念論者＞という意味である。一種の教養小説の形をもつこの小説では、ここで語られているような発想を誤ったものとして語り手が克服するプロセスがたどられるわけであり、翻訳書のような誤読は、この作品の根幹に関わる重大なものと言わざるをえない。

これまで名詞の例をいくつか検討してきたが、次に、形容詞の多義性の例を検討しよう。*Invisible Man* の主人公の祖父は、争い事など引き起こしたことのない穏やかな人物と目されていたが、死に際に、表面的には白人の気に入るような行動をすることによって、逆に彼らの足元を切り崩すように言い残すのであるが、主人公には、この祖父の言葉が謎であった。そのために、彼は、白人に自分の言動を褒められると、まるで意に反して祖父の遺言に従っているような気がして、心穏やかでなくなるのである。

And whenever things went well for me I remembered my

grandfather and felt guilty and uncomfortable. It was as though I was carrying out his advice in spite of myself. And to make it worse, everyone loved me for it. I was praised by the most lily-white men of the town. I was considered an example of desirable conduct – just as my grandfather had been. And what puzzled me was that the old man had defined it as *treachery*. (Ellison, 16)

翻訳書では、"the most lily-white men of the town" を、「町のよりぬきの純潔の白人たち」(Ⅰ、29) と訳出してある。<純潔の男たち> ではなく、「純潔の白人たち」となっているのは、コンテキストから、"men" は事実上 <白人の男たち> を指すと思われたからであろう。(それならば、<純潔の白人男性たち> とすべきではあったが。) たしかに、"lily-white" には、<心の汚れていない> という意味があるが、それにしても、「純潔の白人たち」というのは、やや不自然な表現である。黒人文学の最高峰と見なされている作品の翻訳者が知らなかったというのは信じがたいことであるが、"lily-white" は、こういったコンテキストでは、<黒人の排斥を主張する> という意味であり、主人公は、町の白人男性のなかで最も強く黒人の排斥を主張する人たちにも褒められて、よけいに疑心暗鬼になっているのである。上の引用の前後で、作者は主人公のジレンマの意識をじつに巧みに描いているのであるが、上記の語句が、「町のよりぬきの純潔の白人たち」という、場合によれば、<差別意識などもたない、立派な白人たち> という意味だと誤解されうるような表現で訳出されているために、焦点がぼやけてしまっている。

Light in August の翻訳書で、アームスティッドという名の男が、「女というものはだいたい、ひとにやさしくはするが、あまり親切にはしないものだ。」(10) と考える箇所がでてくるが、これも分かりにくい。原文では、この部分は、"I reckon womenfolks are likely to be good without being very kind." (Faulkner, *Light in August*, 12) となっている。これは、女性に関するアームスティッドの一般的な考察であるが、これは、

男に騙されて妊娠し、棄てられ、今はその男を探し求めて旅に出ているリーナ・グローヴに対する女性の態度に関する考察が直接のきっかけとなってなされたものである。原文では、“good” は、「やさし［い］」という意味ではなく、＜善良な＞ という意味で使われているのであって、アームスティッドは、これまでの経験から、いわゆる＜善良な＞女性は、リーナのような女にはあまり親切にしないことを知っており、そのことをここで考えているのである。

ジェファソンの町の人たちは、臨月のお腹をかかえてやってきたリーナを受け入れ、こぞって助けようとする、という通説にまどわされて、状況を正確に把握する読者は少ないようだが、実際には、リーナを助けようとする人物は作中ではほとんど描かれないのである。彼女に一目惚れして助けようとするバイロン・バンチ、迷いながらも最後には協力するゲイル・ハイタワー、そして彼女の出産に立ち会おうとする医者は、いずれも例外的な人物とされており、しかもすべて男性である。バイロンの下宿屋の女主人のビアード夫人はリーナに親切に対応する、と考える読者が多いようだが、バイロンがリーナをジョアナ・バーデンの屋敷の黒人小屋に連れて行こうとするのは、ビアード夫人が、自分の経営する下宿屋でリーナが出産するのを好ましく思わないためではないか、と考えるハイワターの推測が間違っていると判断する根拠はない。そして、バイロンの見解を鵜呑みにすべきではないにしても、彼が、ハイタワーに向かって、“And I'll ask you what will she be getting from the white women in Jefferson about the time that baby is due. . . .” (314) といって、ジェファソンの町の白人女性たちのリーナに対する冷淡さをなじるとき、彼の反応が的外れだと判断する根拠も見当たらない。つまり、アームスティッドの考察が本質的に正しいことが、やがて分かる仕組みになっているのである。

Light in August では、さまざまな人物のリーナに対する、そして、やがてはリーナとバイロンというカップルに対する拒絶反応が一つの重要な要素をなしており、アームスティッドの考察が、その一つの予示として機能しているのである。先程の問題の箇所は、＜女の場合は、たぶん人にとりわけ親切にしなくても、善良だということになるんだ。＞ とでも訳出すべきであ

ろう。実際、この箇所の直後に、“But it's only a bad woman herself that is likely to be very kind to another woman that needs the kindness. . . .” (12-13) とアームスティッドが考えを進めることが書かれているが、この “bad” が、先程の “good” の反意語であることは明かであり、そのことからも、問題の “good” を「やさし［い］」と理解することが、本文からかけ離れていることが分かる。そして、このアームスティッドの考察の直後に、彼の妻が、リーナに対して、彼の予測を半ば裏切る態度にでるわけだが、この味わい深いエピソードをきちんと理解するためにも、問題の箇所を正確に理解すべきである。

次に、別の形容詞の <homely> という単語の場合を考えてみよう。

> He[Robert Kincaid] wasn't handsome, not in any conventional sense. Nor was he homely. (Waller, 32)

翻訳書では、“homely” は、「家庭的な感じ」(52)と訳出されている。

> He[Johnny Fontane] made a little small talk with her, found out about what she had been like as a kid, whether she had been a tomboy or boy crazy, whether she had been homely or pretty, lonely or gay. (Puzo, 157)

翻訳書では、“homely or pretty” の部分は「家庭的か派手好きか」(上、238) と訳出されている。おそらく、翻訳者たちは、<家庭> という意味の <home> と、名詞に付けられて <〜のような>、<〜らしい> という意味の形容詞を作る <ly> という接尾辞から成り立っている “homely” という単語が <家庭的な> という意味であると信じて疑わなかったことであろう。たしかに、“homely” には <家庭的な> に近い意味がないことはない。しかし、とくにアメリカ英語では、こういったコンテキストでは、容貌に関する語義で使われるのである。上の 2 つの例の場合は、それぞれ “handsome” あるいは “pretty” の反意語として使われているので、そ

れほど推測しにくいことではなかろうが、この単語は、<ハンサムではない>、<不器量な> といった意味をもつ。

ところで、形容詞の語感を摑むには、シソーラスが役立つ。*The Random House Thesaurus* で <homely> を見ると、最初に、"The mother is beautiful, but the daughter is homely." という例文が示され、ついで、"plain-looking, plain, not good-looking, ordinary, drab, unattractive, ill-favored, uncomely, unhandsome, graceless, ungraceful, rather ugly" という類義語群が示されている。

しかし、アイオワ州（！）の田舎に住む女性と偶然出会って数日共に過ごした後、その女性が終世忘れられなくなり、他の女性には「興味がもてな［くなった］」(172) という男が「家庭的な感じ」であったかどうか、あるいは、マフィアの主要なメンバーでもない男のデイトの相手が若いころに「家庭的」であったかどうかなど、どうでもよい事かもしれない。しかし、小説ではないが、ウォールト・ホイットマンの重要な詩、"Song of Myself" の次の詩行の場合はどうであろうか。

Twenty-eight young men bathe by the shore,
Twenty-eight young men and all so friendly;
Twenty-eight young years of womanly life and all so lonesome.

She owns the fine house by the rise of the bank,
She hides handsome and richly drest aft the blinds of the window.

Which of the young men does she like the best?
Ah the homeliest of them is beautiful to her. (Whitman, 38)

ある翻訳書では、8行目を、「おやおや一番素朴な若者がこのご婦人はお気に入り。」（ホイットマン、119）と訳出してある。問題の <homely> という単語を、人柄を表わす単語であると受け取ったのであろう。たしかに、こ

の単語は、人柄を表わして、＜気取らない＞、＜素朴な＞ という意味で使われることがある。しかし、窓のブラインドの後ろから、かなり離れたところで水浴しているはずの若者たちを見ている女性に、彼らの人柄が分かるものであろうか。同じ詩の別の行で、<homely> が "Pleas'd with the homely woman as well as the handsome" (Whitman, 64) ともう一度使われているところでは、「不器量な」(173) と訳出されているので、共訳者たちがこの単語の ＜不器量な＞ という意味を知らなかったわけではなかろう。たぶん、＜若者たちのうちで最もハンサムでないものが彼女にとって美しい。＞ というのでは意味をなさないと思われたので、論理の一貫性を保つために、"the homeliest" をプラスの意味で受け取り、「一番素朴な」と訳出したのであろう。じつは、この場合の最上級の比較表現には、＜～ですら＞ という意味が含まれているのであり、この行では、詩人は、＜あー、彼らのなかで一番見劣りするものですら、彼女にとっては美しい若者なのだ。＞ といった意味のことを言わんとしているのである。つまり、この詩行は、<Ah even the homeliest of them is beautiful to her.> のように解釈すべきなのである。ついでに言えば、もし、訳文の「お気に入り」が、英語の <favorite> に相当するもので、最上級的な意味をもつのであれば、原文は、原級の "beautiful" を使った表現ではなく、<Ah the homeliest of them is the most beautiful to her.> のように、最上級の表現が使われていたはずである。

次は、やや長いが、ii節の「誤った類推」のところで言及した、年中行事化した、オールド・ベンと呼ばれる大熊のハンティングにキャンプから出かけるときの様子の描写である。アイクの視点で書かれている。

> There were five guests in camp that night, from Jefferson: Mr Bayard Sartoris and his son and General Compson's son and two others. And the next morning [Ike] looked out the window, into the gray thin drizzle of daybreak which Ash had predicted, and there they were, standing and squatting beneath the thin rain, almost two dozen[s] of them who had fed Old

Ben corn and shoats and even calves for ten years, in their worn hats and hunting coats and overalls which any town negro would have thrown away or burned and only the rubber boots strong and sound, and the worn and blueless guns and some even without guns. While they ate breakfast a dozen more arrived, mounted and on foot: loggers from the camp thirteen miles below and sawmill men from Hoke's and the only gun among them that one which the log-train conductor carried: so that when they went into the woods this morning Major de Spain led a party almost as strong, excepting that some of them were not armed, as some he had led in the last darkening days of '64 and '65. (Faulkner, *Go Down, Moses,* 226)

翻訳書では、本文の下から4行目のコロン以下を次のように訳出してある。

……というわけで、この朝みんなが森に入りこんでいったときには、ド・スペイン少佐は、そのうちの何人かが武装していないということを除けば、六四年と六五年のあの最後の陰欝な時期(南北戦争の末期)に少佐が率いた若干の兵隊たちとほとんど同じように屈強な一団を率いてゆくことになったのである。(265)

この翻訳書からの引用で気になるのは、「屈強な」という形容詞である。たしかに、原文でも、"strong" という形容詞が使われているが、集まっている面々の描写を読んでも、とても「屈強な」グループとは思えない。しかも、"the darkening days of '64 and '65" というのは、翻訳者注にあるとおり、南北戦争の末期をさしているのだが、1864年の9月には北軍のシャーマン将軍がアトランタを陥落させており、1865年になると南軍は総崩れの状態となった。この頃に、ド・スペイン少佐が「屈強な一団を率い」たはずはないのである。じつは、原文の "strong" は、ふつう <a force 2,500 strong>、

あるいは、<a 2,500 strong force> のように用いられて、<総勢〜の>という語義をもつ単語として使われているのである。上記の引用で、作者が熊狩りのパーティーの参加者の人数にこだわっていることは、すぐに見て取れよう。この引用の直後に、"The little yard would not hold them. They overflowed it, into the lane where Major de Spain sat his mare. . . ."(226) という、人数に関する描写が続いていることからも、この "strong" のこの場合の語義に疑いの余地はない。つまり、問題の箇所は、<ほとんど同じ人数の一団を> などのように訳出しておくべきところなのである。[11]

v　論理性

これまで、便宜的にいくつかの項目に分けて問題を考えてきたが、つじつまが合わなくなったら、もう一度考え直すときであることがよく分かる。小説であるから、何が起きるか分からないし、どんな奇想天外な論理が展開されるか分からないわけだが、とりあえずは、日常的な論理で読む以外に手はない。このことは、重要な例として今回挙げたものにほとんど全部該当するのであるが、「正義は金に随伴する」とか、「理想主義者なら何をしようと何が周囲で起ころうと問題ではない」とか、「女というものはだいたい、ひとにやさしくはするが、あまり親切にはしないものだ。」といった読みをした場合には、再度原文を検討するのが当然であろう。最後に別の例を3つ検討しておくことにしよう。いずれも、翻訳書からの引用をまず読むことにする。最初の例では、*Rabbit, Run* のなかでペンシルベニア州の1地方に伝わっていたとされる、<フォスナートの日>についての説明の一節である。

> 「ぼくが六つか七つのときだったにちがいありませんが、祖父はぼくがフォスナートにならずにすむように二階でずっと待っていました。祖父はそのころ、ぼくたちの家に住んでたんです。(中略) ある年のこと、ぼくは最後まで階下にいたのですが、両親か誰かがぼくを [からかった] んです。それで、それがいやで、ぼくはたぶん泣いたような気がし

ます。ともかくそんなわけで、祖父がずっと二階にいたんですよ。」(上、183)

翻訳書からは、語り手が、子供の頃、「最後まで階下にいた」ためにフォスナートになってしまい、からかわれて泣いたことがあったので、別の年に、祖父が、語り手が「フォスナートにならずにすむように二階でずっと待って」いた、と読み取れるが、どういう状況かきわめて分かりにくい。アメリカでは寝室は2階にあることが多く、この場合でもそうなのであるが、語り手の祖父が待っていてくれたのが、彼が「六つか七つのときだった」とあるわけだから、彼がからかわれたのは6歳、あるいはそれ以前ということになる。そんな小さな子供が、「最後まで階下にいた」というのは、ふつうでは考えられない状況である。原文では、「ぼくは最後まで階下にいた」の部分に当たる箇所は、"I was the last downstairs[.]" (Updike, 125) となっている。つまり、<(朝) 2階から降りてくるのが、ぼくが最後になった。> という意味なのである。そう考えてはじめてつじつまが合う。たしかに、"I was the last downstairs[.]" は多義的で、コンテキストによっては、<2階に上がるのが、ぼくが最後になった。> という意味に理解すべき場合もある。[12] しかし、ある1つの読みで論理性が成立しなければ、再考すべきであることに変わりはない。

次の *Go Down, Moses* の翻訳書からの例はどうであろうか。

ある夕方、サムが夜休ませるために家畜置き場に入れようと馬と騾馬を連れていってみると、仔馬がいなくなっていて、サムは気違いのようになった母馬をやっとなかに入れるのでせいいっぱいだった。最初は、母馬が仔馬と別れたところまで、母馬に仔馬を連れもどさせようと考えたが、その牝馬はどうしても言うことをきかない。(237)

どう考えても、「母馬が仔馬と別れたところまで、母馬に仔馬を連れもどさせようと考えた」という部分が変である。もし、「母馬が仔馬と別れたところまで、母馬に仔馬を連れもどさせ」ることが可能なのであれば、最初から、

「家畜置き場」まで連れもどさせたらよいはずである。原文は以下のようである。

> One evening when Sam brought the horses and mules up to stable them for the night, the colt was missing and it was all he could do to get the frantic mare into the lot. He had thought at first to let the mare lead him back to where she had become separated from the foal. But she would not do it. (Faulkner, *Go Down, Moses*, 204)

つまり、翻訳書では、4行目の“him”を2行目の“the colt”を受ける代名詞であると理解しているのである。この引用箇所の少し後に、“. . . the colt was dead now, wherever it was” (204) とあるが、その後も一貫してそうであるように、“the colt”は“it”で受けられている。つまり、引用箇所の“him”は、“Sam”を受けているのである。

次に示す例は、長編小説ではなく、ある短編小説からのものであるが、有名な作品なのでここで取り上げげてみたい。問題の箇所は、南部の田舎町で開かれている裁判の場面の一部であり、訴えているのは小作農をしているアブナー・スノープスという男で、訴えられているのは彼に農地を貸している地主のド・スペイン少佐である。アブナーは、ド・スペイン少佐の屋敷を訪れた際にわざと床の敷物を汚し、そのうえ、ド・スペイン少佐に命じられてその汚れを落とそうとした際に故意に乱暴に扱った結果、敷物を台無しにしてしまったのだが、損害賠償として10ドル相当の作物を請求されたことを不服として、ド・スペイン少佐を訴えたのである。アブナーの次男である少年、カーネル・サートリスがこの短編小説の主人公であるが、彼は、この作品の冒頭で描かれるように、父親のアブナーが前の地主のバーン[13] に放火して裁判沙汰を引き起こし、住んでいた土地を追われたことをよく知っているので、今回も、自分の父親が放火の疑いで裁判にかけられていると誤解している。まず、ある翻訳書からの一節を検討しよう。

父と兄のあとから磨滅した踏板を降りると、またも静かな顔が並んでいて三人が間を歩くのを見守っていた。眼鏡をかけた男が厚い板のテーブルのところに座っていて、それが治安判事だとは、言われるまでもない。少年はいまカラーにタイをつけているこの男をひとにらみした。鋭く、勝ち誇るような、身内の者を思っての反抗の目つきだった。少年はこの男をいままでに二度見ただけだ[。] それも疾走する馬に乗っているときであった。その男がいま顔に浮かべている表情は憤怒ではなく、あきれて信じられない思いなのだが、少年にわかる由もなく、判事は借地人の一人が地主を訴えたという事態が信じられない。少年は父の前に立つと、判事に向かって叫んだ――「父さんがやったんじゃない！ 焼いたりなんか……」

「馬車に戻れ」と父が言った。

「焼いた？」と判事が言った――「問題のじゅうたんをその上に焼いたのかね」

「そんな損害賠償を要求している人がいるのですか」と父は言った。(243)

翻訳書のこの部分のみを読めば、引用の4行目の「この男」、つまり、「憤怒ではなく、あきれて信じられない思い」を示す表情を浮かべている人物は治安判事のことであると誰も信じて疑わないであろう。原文はどうなっているであろうか。

He[Colonel Sartoris] mounted the gnawed steps behind his father and brother, and there again was the lane of quiet, watching faces for the three of them to walk through. He saw the man in spectacles sitting at the plank table and he did not need to be told this was a Justice of the Peace; he sent one glare of fierce, exultant, partisan defiance at the man in collar and cravat now, whom he had seen but twice before in his life, and that on a galloping horse, who now wore on his face an

expression not of rage but of amazed unbelief which the boy could not have known was at the incredible circumstance of being sued by one of his own tenants, and came and stood against his father and cried at the Justice: "He ain't done it! He ain't burnt . . ."

"Go back to the wagon," his father said.

"Burnt?" the Justice said. "Do I understand this rug was burned too?"

"Does anybody here claim it was?" his father said. (Faulkner, *Collected Stories,* 17-18)

原文では、6行目の "the man" は、"the incredible circumstance of being sued by one of his own tenants"（自分の借地人の1人に訴えられるという信じがたい事態）に対して、「あきれて信じられない思い」を示す表情を浮かべていたことになっている。つまり、この "the man" は、翻訳書にあるように治安判事を指すのではなく、地主のド・スペイン少佐を指しているのである。翻訳書では、"the man" が治安判事を指すという前提に立っているが、その前提に立てば、この部分は、<借地人の1人に、地主である自分が訴えられたという事態> に対して、判事が「あきれて信じられない思い」を示す表情を浮かべていたことを表わしているはずである。しかし、それでは、判事と地主が同一人ということになるので、つじつまを合わせるために、翻訳書では、「判事は借地人の一人が地主を訴えたという事態が信じられない」というふうに、無理に原文をねじまげて訳出してあるのではないかと思われる。

ところが、それですべてつじつまが合うというわけではない。翻訳書では、治安判事が「疾走する馬に乗っているとき」に、カーネル・サートリスが彼を「二度見た」かのようになっているが、作品の先行する部分から簡単に分かるように、カーネル・サートリスが、「疾走する馬に乗っているとき」に2度見かけたのは、治安判事ではなく、ド・スペイン少佐である。つまり、ド・スペイン少佐が、馬を駆って、汚れた敷物を父親のところに届けにきた

ときと、損害賠償の額を告げにきたときに、カーネル・サートリスは彼を見かけているのであり、ド・スペイン少佐は、そのときとは違って、今はカラーとネクタイをつけているのである。

原文の1行目の“mounted”を「降りる」と訳出してあったり、引用箇所の最後の、<そんなことを主張している者がいるんですかい？> という意味の“Does anybody here claim [that] it was [burnt, too] ?”というアブナーの発言を「そんな損害賠償を要求している人がいるのですか」と訳出してあったり、翻訳書のこの部分は、原文からは相当隔たった内容となっているが、一番問題なのは、人物の取り違えである。しかし、無理につじつまを合わせようとしなければ、“the incredible circumstance of being sued by one of his own tenants”をねじまげて訳出する必要もなく、原文の6行目の“the man”が、治安判事ではなく、ド・スペイン少佐を指していることを理解するのは、難しいことではなかろう。ともあれ、論理性に問題があると思われたら、慎重に原文を再検討すべきであることに変わりはない。 （次号に続く）

注

1 翻訳書のページは、引用箇所の後に（巻と）数字のみで示す。また、同一の作品から原文を引き続いて引用するようなときには、原則として、2回目はページ数のみを示す。なお、翻訳書からの引用の場合、最後のパンクチュエーションを断わりなしに句点に変更している場合もある。

2 原文で使われている <stand> が、“He stands 5 feet 10 inches.”(*Longman Dictionary of Contemporary English* の <stand> の項) などの例文に見られるように、<高さ> を示す目的で使われることは、広く知られているはずである。

The Encyclopedia Americana で <Maltese>、<Doberman pinscher> などの項を参照すると、<肩高> は、“[The Maltese] stands only 5 inches (13cm) high at the shoulder. . . .”や“[The Doberman pinscher's] height at the shoulders is 24 to 28 inches. . . .”のよ

うに表わされるのが一般的であることが確認できる。

3　ちなみに、縦8.5インチ、横11インチの複製画なら、＜an 8 ½×11 inches print＞ と書くのが通例であり、また、美術書で原画のサイズを図版の下に示すときなどは、＜8 ½×11″＞ のように書くのが通例である。ここで、ついでに、あるイギリス小説の翻訳書に見られる、単位を勘違いした例を一つ示しておく。原文は以下の通りである。

> Loaded and untidy shelves, from floor to ceiling, ran round the three walls, well barricaded by wooden display cases of various types which stood, often two or three deep, in front of them. (Murdoch, 59)

翻訳書では、"two or three deep" は「奥行き二、三フィート」(74) となっている。この場合、たしかに、"deep" は奥行きを示しているが、"two or three" というのは、並べられた "display cases" の個数を示しているのである。*Collins Cobuild English Language Dictionary* にある用例、"People were standing three deep on either side of the street." のような場合には、"three" は、通りの両側で通りに沿って横に並んでいる人々が作っている列の厚みを示していることになる。

4　この <lessen> は、南部小説によく出てくるし、フォークナーの他の作品でも数回出てくる。フォークナーに限って言えば、Calvin S. Brown, *A Glossary of Faulkner's South* (New Haven: Yale UP, 1976) で意味を容易に確認できる。

5　短編集からの例であるが、作中のある評論の名前、"'A Quiet Subversion'" (Walker, *You Can't Keep a Good Woman Down*, 47) を翻訳書で「『静かな援助』」(83) と訳出してあるが、おそらく<subversion> と <subvention> を混同したためであろう。ただ、この場合、<subvention> を知っていて、それよりはるかに使用頻度の高い単語である <subversion> を知らなかったということは非常に想定しにくい。ひょっとすれば、<subversion> という単語を知らずに辞典で調べようとして、その際に

うっかりして、直前に載っていた <subvention> の意味を書き写したのではないかとも想像される。もしそうだとすれば、作者のフェミニスト的姿勢が濃厚に出ており、家父長制の打倒の必要性が重要なテーマの1つとなっている作品が多いこの短編集を翻訳しようとする人が、<subversion> という、いわば鍵となる単語を知らなかったという、にわかには信じがたい状況が存在していたことになる。

また、これは、識別を誤った事例とは言い切れないのだが、同じ翻訳書で、<並み以下の> という意味の "mediocre" (144) を「中世紀的」(242) と訳出してある。そして、"[his] work was exceedingly mediocre. . . ." (32) のように別の箇所で <mediocre> が使われているところでも、「古めかし［い］」(58) と訳出してあるので、どうやら、翻訳者が、この単語と <medieval> という単語をごっちゃにして覚えているらしいことが伺える。それにしても、「中世紀的」といった表現があるのだろうか？

6　*Invisible Man* で <overtly> が使われるのはこの箇所のみなので、翻訳者がこの単語を知らなかったという可能性、つまり、これがすでに述べた最初のパターンに属する識別の誤りである可能性も否定し切れない。

7　原稿の段階では正しく読み取られているのに、字の誤りのため結果的には <誤訳> となっていると考えらるものも非常に多い。少しだけ例を挙げておく。

	誤	正
crabs (Bellow, 43)	わに (62)	かに
comb (Bellow, 56)	棒 (81)	櫛
skins (Bellow, 142)	毛布 (199)	毛皮
whips (Bellow, 177)	靴 (248)	鞭
stones (Bellow, 292)	右 (414)	石
ridge (Faulkner, *Moses*, 17)	屋根 (20)	尾根
the faucet (Puzo, 151)	銃口 (上、230)	蛇口
cheek (Roth, 8)	顔 (13)	頬
white lines (Roth, 8)	曲線 (15)	白線
straps (Updike, 77)	トラップ (上、110)	ストラップ
[the] fact (Twain, 389)	事業 (479)	事実
arrowlike(Waller, 102)	火のような(131)	矢のような

8　ついでに言えば、<bull> が象、鯨、大鹿などの雄を意味し、“cow” が雌を意味する場合、<dog> が <bitch> と対を成す単語として、＜雄犬＞ を意味する場合、また、一般に ＜雄鹿＞ という意味で使われる <buck> が兎、ネズミなどの雄を意味し、同様に、一般に ＜雌鹿＞ という意味で使われる <doe> がこれらの動物の雌を意味することなどがあるので、コンテキストを正確につかむことが大切である。

9　同一の作品に、“[T]here was no occasion to give up my dream yet a while.” (300) および “[T]here wasn't any occasion for hurry.” (422) という箇所が出てくるが、翻訳書では、それぞれ、「まだ当分、わたしの夢を投げ出す機会などあるわけがなかった。」(375)、「ちっとも急ぐ場面にぶつかりませんでしたから」(521) と訳出されている。実際には、どちらの場合も、“occasion” は、＜理由＞ という意味である

10　*Longman Dictionary of American English* の定義するところでは、<barn> は、“a farm building for storing crops and food for animals, or for keeping the animals themselves” を意味するとなっているが、実際には、収穫した農作物と家畜（およびその飼料）の両方を入れておくために使われることがよくあり、さらに、農機具を格納するために使われることもある。2つあるいは3つのこのような目的で使われる建物は日本ではふつうは見かけない。こういった、日本ではあまり見かけない風物については、外来語として片仮名で表記して、必要とあれば訳注をつけておくほうが、誤解を生むことが少ない。つまり、<barn> は、＜バーン＞ と訳しておくのがよいと思われる。*The Golden Picture Dictionary* のような図解辞典にもあるとおり、<barn> のほうが母屋よりも大きい場合も結構あるが、いずれにせよ、一般に <barn> の訳語として充てられる ＜納屋＞ という単語から連想されるものとはほど遠い。

この引用箇所の “barn lot” は、とくに南部で <barnyard> の代わりによく使われる単語である。(ただし、非分離の形で、<barnlot> となるのがふつうである。) かりに、“barn” を ＜納屋＞ と考えるにせよ、翻訳書で、“barn lot” を「納屋」と訳出してあるのは、不用意である。

11　むろん、ド・スペイン少佐が南北戦争の末期に率いた一団が「屈

強」でなかったからといって、原文の <as strong as> という形で使われた "strong" が強さの度合いを示していないということにはならない。したがって、原文の問題の箇所は、単独では、<同じくらいの力をもった> という意味である可能性もある。しかし、そのような解釈では、作者がわざわざ挿入している "excepting that some of them were not armed" という部分の説明がつかない。やはりここは、<なかには銃をもたぬ者もいたが、人数は〜とほとんど同じくらいの一団> という意味であると受け取るべきである。

なお、原文の下から2行目の "some" は、翻訳書では「若干の兵隊たち」と訳出されているが、実際には <some parties> のことであることは言うまでもない。このずれも、問題の "strong" を誤解したために生じたものと思われる。

12 これは面白い現象であるが、<I was the last upstairs.> も多義的である。つまり、<階下に降りてくるのは、私が最後だった。> という意味の場合でも、<2階に上がるのは、私が最後だった。> という意味の場合でも、"I was the last downstairs." と <I was the last upstairs.> は同義になりうるのである。

13 バーンについては、注10参照。

参照文献

英語文献

Anderson, Sherwood. *Winesburg, Ohio.* New York: Viking, 1958.

Baker, Houston A., Jr. *Blues, Ideology, and Afro-American Literature: A Vernacular Theory.* Chicago: U of Chicago P, 1984.

Bellow, Saul. *Henderson the Rain King.* New York: Penguin, 1976.

Carroll, Peter N., and David. W. Noble. *The Free and the Unfree: A New History of the United States,* 2nd edition. New York:

Penguin, 1988.

Ellison, Ralph. *Invisible Man.* New York: Modern Library, 1992.

Faulkner, William. *Absalom, Absalom!* New York: Vintage, 1990.

———. *Collected Stories of William Faulkner.* New York: Random House, 1950.

———. *Go Down, Moses.* New York: Vintage, 1990.

———. *Light in August.* New York: Vintage, 1990.

———. *The Wild Palms.* New York, Vintage, n.d.

Lewis, R. W. B. *The American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century.* Chicago: U of Chicago P, 1955.

Murdoch, Iris. *The Sandcastle.* London: Penguin, 1960.

Puzo, Mario. *The Godfather.* Greenwich, Conn.: Fawcett, 1969.

Roth, Philip. *Goodbye, Columbus and Five Short Stories.* Boston: Houghton Mifflin, 1959.

Segal, Erich. *Love Story.* New York: Avon, 1977.

Styron, William. *Sophie's Choice.* New York: Bantam, 1980.

Thoreau, Henry David. *Walden and Civil Disobedience.* Ed. Owen Thomas. New York: Norton, 1966.

Twain, Mark. *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court.* Ed. Bernard L. Stein. Berkeley: U of California P, 1984.

Updike, John. *Rabbit, Run.* New York: Knopf, 1960.

Walker, Alice. *The Color Purple.* New York: Pocket Books, 1985.

———. *You Can't Keep a Good Woman Down.* San Diego, Calif.: Harcourt, 1980.

Warren, Robert Penn. *All the King's Men.* New York: Harcourt, 1946.

Whitman, Walt. "Song of Myself." *Leaves of Grass.* Ed. Sculley Bradley and Harold W. Blodgett. New York: Norton, 1973.

Williams, Tennessee. "A Streetcar Named Desire." *A Streetcar Named Desire and Other Plays.* Ed. E. Martin Browne. London: Penguin, 1962.

日本語文献（著者の原名、翻訳書のタイトルのアルファベット順）

アンダスン、シャーウッド。『ワインズバーグ・オハイオ』 東京：新潮社、1959。（新潮文庫）

ベロー、ソール。『雨の王ヘンダソン』 東京：中央公論社、1988。（1967年の初版の中公文庫版）

エリスン、ラルフ。『見えない人間（Ⅰ）』、『見えない人間（Ⅱ）』 東京：早川書房、1974。（ハヤカワ文庫）

フォークナー、ウィリアム。『アブサロム、アブサロム！』 東京：冨山房、1968。（フォークナー全集12巻）

——。『八月の光』 東京：冨山房、1968。（フォークナー全集９巻）

——。『行け、モーセ』 東京：冨山房、1973。（フォークナー全集16巻）

——。『短篇集（一）』 東京：冨山房、1981。（フォークナー全集24巻）

——。『野性の棕櫚』 東京：冨山房、1968。（フォークナー全集14巻）

マードック、アイリス。『砂の城』 東京：集英社、1978。（集英社文庫）

プーヅォ、マリオ。『ゴッドファーザー［上］』、『ゴッドファーザー［下］』 東京：早川書房、1973。（ハヤカワ文庫）

ロス、フィリップ。『さようなら コロンバス』 東京：集英社、1977。（集英社文庫）

シーガル、エリック。『ラブ・ストーリ』 東京：角川書店、1972。（角川文庫）

スタイロン、ウィリアム。『ソフィーの選択［上］』、『ソフィーの選択［下］』 東京：新潮社、1991。（新潮文庫版：1983年の初版の改訂版）

ソーロー、ヘンリー・デイヴィッド。『森の生活——ウォールデン』 東京：岩波書店、1979。（1951年の岩波文庫版初版の表記などをあらためて改版としたもの）

トウェイン、マーク。『アーサー王宮廷のヤンキー』 東京：創元社、

1976。(創元社文庫)

アップダイク、ジョン。『走れウサギ［上］』、『走れウサギ［下］』東京：白水社、1984。(白水*u*ブックス版：1964年の初版を改訂した1975年の版をさらに改訂した版)

ウォーカー、アリス。『いい女をおさえつけることはできない——アリス・ウォーカー短篇集』　東京：集英社、1986。(集英社文庫)

——。『カラーパープル』　東京：集英社、1986。(集英社文庫)

ウォラー、ロバート・ジェームズ。『マディソン郡の橋』　東京：文藝春秋、1993。

ウォレン、ロバート・ペン。『すべて王の臣』　東京：白水社、1966。(「新しい世界の文学」42巻)

ホイットマン、ウォールト。『草の葉（上)』　東京：岩波書店、1969。(岩波文庫)

ウィリアムズ、テネシー。『欲望という名の電車』　東京：新潮社、1988。(新潮社文庫)